
疑問文。

睦月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疑問文。

【Nコード】

N4810D

【作者名】

睦月

【あらすじ】

自分の所持する島に、一週間の予定できたリカ。彼女の昔の儂く悲しい恋の思い出。

ルルルルル・・・ルルルルル・・・。

私の耳元で、電話が鳴った。

今までは、雄大な海が、静かな波を立てて目の前に広がっていたのに。

今までは、心地よい海の波の音が、私の耳の中に広がっていたのに。

その音は、あまりにあっけなく、私の夢を壊した。

パツと目を開けると、白い天井が私の頭上にかかっていた。

「・・・どんな夢だったっけ・・・？」

たしか、とてもいい夢だった。

それなのに思い出せない。海が、見えていた事以外は。

「あつ、電話・・・。」

誰に言うともなくつぶやき、電話を取る。

「もしもし・・・。」

『おはようございます。ただいまの時刻は6：30です』

モーニングコールか……。頼んでおいたのを忘れていた。

「あ、どうも……」

言ってから、くすつと笑ってしまった。

相手がいないのは分かっているのに。返事をしてしまった。

電話を切ると、起き上がり、部屋を横切って洗面所に行った。

蛇口をひねって水を出し、顔を洗う。

朝の寝ぼけた意識には、冷たい水が一番いい。と私は思う。

口をゆすいで、洗いたての、ふわふわのタオルで顔を拭く。

「はぁ……」

ため息をひとつつくと、私は再び部屋を横切ってカーテンを開ける。

「あつ……」

思わず目をつぶりたくなるほど眩しい朝日が、私の部屋をさつと照らした。

私は窓を開けてふかふかのソファに座った。

そして朝日にきらめく美しい海をじつくりと見た。

私は今、とある小さな島に来ている。

この島は、大切な、私の大切な人から受け継いだ、宝物。

今はこの島は私のものだ。

きれいな海と自然を売りにして、ホテルをたてて、観光スポットにしている。

私の部屋は、広大な海がよく見える、一番の人気部屋。

思う存分海を眺めてから、シャワーを浴びようとバスルームに行った。

服を脱いで、湯気の立つお湯の下に立つと、

朝の空気にさらされて冷えていた素肌があたたまっていく。

シャワーを終えて身体を拭き、バスローブを着た。

私は今度は窓を閉めて、何をしようか考えようと、ソファに戻った。

さて、何をしようか？

ここには昨日の夕方ついたばかりである。

一週間しかない滞在期間。

少しでも無駄にしたいくないと思って早起きをしたはいいが、

何をすればいいのか？

時刻は7：00。

泳ごうか？ それにはまだ寒すぎる時間帯だ。

散歩かな？ それもあまり気が進まない。

とりあえず私はロビーに降りてぶらぶらする事にした。

着替えて、一階に降りていった。

ロビーにもまだほとんど客はいない。

フロント係がぺこりところちらにお辞儀をした。

わたしも笑顔で会釈し、廊下を歩いていった。

どうしようかと周りを見わたすと、売店がある。

ちようどのどが渴いていたところだ。

飲み物と・・・サンドイッチでも買おうか？

私はふらりと売店そこに立ち寄った。

けて広いとは言えない店の中を見回した後、

ゆっくりと、店の中を見て回った。

冷たく冷えたペットボトルのお茶を手にして、

好物のツナサンドを見つけると、レジへと向かった。

品物をレジにおいて、財布を出そうとすると、

ふと、レジの横に並んでいるポストカードに目が行った。

『久しぶりに、手紙でも出そうかしら？』

私は、海が写っているポストカードを選んで、買った。

十分後、私はロビーのテーブルで、

サンドイッチ片手に手紙を書いていた。

レオへ

私が今どこから手紙を書いているかお分かりですか？

あなたが知ったとしても、とても喜んでくださるでしょう。

それは、それは素敵な所です。きれいな海も見えます。

私はここに一週間ほど滞在するつもりです。

私たちが、前々からよく来ていたところですよ？

さて、どこだか分かるでしょうか？

〜リカより〜

私は見ただけで走り書きと分かるような字で、長さで、手紙を書き上げた。

レオ……。レオ……。

私が愛した人。

私を愛してくれた人。

返事が、来るかしら？

来ないかもしれないわね。

この島は、レオから譲り受けた、大切な宝物。

私には以前、もっと大切な宝物が一つあった。
ひと ひとりいた

でも、それは海に沈んでしまった。

10年前の、太平洋客船沈没事故で。

それこそが、本当の、本当の宝物。

私は、泣きながらサンドイッチを食べ終え、お茶を飲み干した。

空のペットボトルに、ポストカードを丸めて入れた。

この手紙がレオに届くように、海に流す。

辛い時はいつもそうして、悲しみをまぎらわせた。

今度もそうしよう。私は、浜辺に向かって歩き出した。

涙を、点々と歩道に残しながら。

私は、いつも手紙に質問を残す。疑問文を。

そうすれば、返事が帰ってくるような気がするから。

返事と一緒に大切な宝物も帰ってくるような気がするから。

浜辺に着くと、私は、思いっきりペットボトルを投げた。

潮の流れが急だから、手紙はどんどん沖に流されてゆく。

その場に立って、ペットボトルが見えなくなるまで。ずっと、ずっと。

見守っていた。

見えなくなっても、沖を見つめていた。

返事が、来るかもしれない。

・・・。。

しばらく待っていると・・・。

きた。

大きな波。これが彼からの返事。これが彼の分身。

ザパァーン！

大きな音を立てて、波打ち際にせまって来ると、私を、抱きしめてくれる。

『大丈夫だよ。泣かないで。』

あの頃の声でそう言ってくれる。

私の腰の辺りを、やんわりと、しっかりと抱いて、一瞬だけ抱いて。

そして、また海に戻っていく。

いつも、彼を待っていると、いつの間にか涙が止まる。

抱きしめてくれる頃には、いつもの私。強い私。

でも、泣きたい時にはまた来てもいい？

大好きだよ。レオ。

愛してるよ。レオ。

（後書き）

まあ、そういうことです。

設定的にはリカは30代後半ってトコですね。

レオは、太平洋で死んでしまったと。

ちよっと分かりにくかったらゴメンナサイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4810d/>

疑問文。

2010年10月17日02時30分発行